

D. 総合学習の研究

安藤富美子 川田 基生 白井 宏 鈴木洋一郎
高須 明 高橋 祐子 田中 裕巳 徳井 輝雄
増田 温美 松井 一幸 三橋 一夫 山田 雄一

「ゆとり」の時間を利用した総合学習の実践に向けて

私たちのグループは、昨年度は「総合学習の場としての研究旅行の試み」を本紀要に発表した。執筆者は白井、高橋（旧姓服部）、田中、徳井、山田の5名であり、高2の研究旅行にクラス担任として、あるいは教科担任、養護教諭として直接に引率、参加したものからなっていた。内容的な面からみると、広島における原爆学習の事前指導という点ではかなり教科の枠をこえたチーム・ワークが発揮された。しかし、研究旅行全体について、総合学習という観点から系統的に指導するという点では全く不十分なものであった。また、高2に直接的な関係をもつもののみが執筆し、グループ全体での事前の討議も、事後の検討も十分には行なわれず、総合学習の研究グループとしては、いまだ研究の方向を模索している段階であったと言えよう。

その後、『総合学習の探求』（勁草書房）の読書会によって、総合学習についての先行的な実践を学び、グループ全体での系統的な実践に歩み出すための試案づくりの必要性が認識された。実施学年は当面考えないこととして、「総合的に人間を考える」という視点から今、問われるべきテーマは何か、として田中から提示されたものは次の6つであった（56.3.4）。

人間を考える

(1) 生物的存在としての人間

サルの社会とヒトの社会の比較。親子関係、性関係を比較することによって、人間の生物的側面とともに、人間社会の存立基盤を明らかにする。インセクト・タブーやホモ・セクシャルの存在に注目してみると何が明らかになるのか。

(2) 社会的動物としての人間

類的存在としての人間とは何かを明らかにするために、家族→地域社会→職場→国家→世界という多層な環の中での人間の状況をおさえなおしてみる。共感能力といったものを人間の“本質”とおさえる

ことが可能なのかどうか。

(3) Human Natureとは何か

(2)とは反対に、人間の本質はむしろ、剥き出しのエゴイズムあるという観点から、現代における人間の悪業——ヒトラーのユダヤ人虐殺、アパルトヘイト、日本人の中国人・朝鮮人差別、原水爆問題、身障者差別など——を直視させ、真の平和とは何かを考えさせる。

(4) 自然と人間

自然を労働の対象としてのみとらえてきた近代的労働観の陥穀を、砂漠の広がり、大気汚染、人災としての災害などを通して考えなおす。逆に、アニマルズムや生態系のもつ意味を通して、自然的存在としての人間へというアプローチも考えられる。

(5) Homo Faberとしての人間

縄文人→弥生人→金属文化の人間への移り行きを、自然採集→自然への働きかけ→加工、分業の徹底化としておさえ、コンピュートピアが実は、管理と作業の分離であり、対象としての自然の喪失であることに気づかせる。この労働論の中で、「ボク、食べる人」という性的分業論のもつ問題にまで論及する。あらためて職業とは何かを考える。

(6) 「人が生まれる」ということ

第2の誕生の意味、自立とは何かを考えさせる。その中で、学校のもつ意味を、①その集団性（生徒一生徒関係、生徒-教師関係という2つの軸）、②閉じられた時間、空間、という二面からとらえ、「学校とは何か」を徹底的に考えてみる。

以上の6つのテーマを検討していく中で、次の2点が確認された。第1に、当面は、(1)の「生物的存在としての人間」というテーマを中心に教材化してみよう、ということ。そのために、指導形態まで含めた細案を考えてみる必要がある、ということ。第2に、まずとりあえず、(1)のテーマでの実施学年を中3とし、昭和56年

度から更にふえる「ゆとり」の時間を、月1～2時間、グループがもらいうける形で実践に取り組んでみようということであった。「生物的存在としての人間」をテーマとして、1年に10回程度の「ゆとり」の時間を利用する総合学習というプランが、ようやく始動した訳だが、さらに細案がかたまってくるのには1カ月を要した。また実施学年については、中学ならば3年生が卒業研究的な意味もあって一番望ましいだろうと確認されていたが、5月一杯は修学旅行の事前指導などもあり、第1回は6月下旬に、ということで、中3の担任に決まっている高須に、中3の学年会との連絡が依頼された。

4月16日に徳井から提示された実施案は次の5つであった。

生物的存在としての人間 ——自分自身の理解のために——

(1) 宇宙の成立から人間の誕生まで

VTR『COSMOS』を見る。生命の重さ、自己の存在と宇宙とのつながりを考えさせる。人類全体からみると一人の命は全く微小なものであっても、その一人の命が、宇宙創世の時から、一瞬のとぎれもなく続いてきたものであること、生命の尊厳を認識させたい。

(2) サルの生態から

講演と見学（日本モンキーセンター）を中心とする。先天的なものと、後天的なものとが、サルと人間においては、どのような現われ方の異同があるのかをおさえ、教育（学習）の意味を明確にする。

(3) ロボットと人間

講演と映画（「ロボットへの道」26分など）を中心とする。コンピューターと人間の脳の働きを比較し、人間の柔軟性、適応力、学習能力、創造性に気づかせる。

(4) 生物における性の役割

講演またはパネルディスカッション（当グループの教師が数人パネラーとなって）。例として、サルを再度、中心的にとりあげてもよい。性差はどのような点にあらわれるのか、あるいは作られるのか。能力や性格においてはどうか。進化と性はどのような関係にあるのか。動物の性と人間の性とを比較してみると、家族や社会の形成の面で、どのような役割の違いがあるのか。

(5) 社会的動物としての人間の誕生

映画（「サルからヒトへ」29分、「蜂の生活」44分など）とまとめとしての講義、サルや蜂の社会と人間の社会との対比。人間誕生に際しての労働の役割に気づかせる。

以上の5つの実施案について検討し、討論する中で更に次のようなテーマが浮かび上がってきた。

(6) 信号と言語

サルにおける身ぶりや声などの信号と、人間の言語との比較。人間は身ぶりや声などの他に、言葉を持ち、文字を持っている。人間の言語が、人間の社会の発達にどのような力を持っていたのかを考えさせたい。実施方法は未定。

(7) 「生きている」とは何か

植物人間、安楽死の問題を通して、“生きている”とはどういうことなのかを考えさせる。脳死とともに、精神における生死の問題（生きがい喪失や三無主義の問題など）をもあわせて考えさせる。精神科医などによる講演が考えられる。

(8) 遺伝子工学と人間

遺伝子工学の発展が、将来、優生学的な立場から国策として利用され、人間の尊厳を脅かす危険を持たないかどうかを考える。そのために、遺伝子とは何か、遺伝子工学とは何かをおさえた上で、遺伝子工学への危惧も紹介する。胎児の性別判定、ダウン症候群の判定などが持っている意味も考えさせたい。実施方法は未定。

(9) 健康と病気

健康と病気という問題を通して、①“健康”が前提としている人間観、②精神（心）と身体との相関、あるいは関係、を考えさせたい。健常者、病者、障害者という区分が、人間社会においてはどのような意味を持つのか。労働力の概念、そして医療とは何か再検討するところまで行ければよい。実施方法は未定。

(10) 食べもの

個体と種の維持のために生物は“食べもの”を攝取し続ける。“食べもの”に注目することによって、①食物連鎖、それを通じての自然淘汰、水銀中毒などの公害、②“食べもの”の技術としての加熱、加工が人類史にとって、どのような意味を持ったか、③“食べもの”と宗教、政治との結びつき、④“食べもの”の地域性、民族性、などの問題を考えさせたい。実施方法は未定。

以上の10のテーマは、順不同で出されたものであるので、実施段階では、次のような順番にすることが適切であると思う。

- (1) 宇宙の成立から人間の誕生まで
- (2) 社会的動物としての人間の誕生
- (3) サルの生態から
- (4) 生物における性の役割
- (5) 信号と言語
- (6) 食べもの

- (7) ロボットと人間
- (8) 遺伝子工学と人間
- (9) 病気と健康
- (10) “生きている”とは何か

(1)で生物の歴史の中に、ヒトの誕生の意味を位置づけたあと、(2)、(3)、(4)では、主にサルと人間との比較によって、人間にとての労働、学習、性の果たしている役割を明らかにする。(5)、(6)では、言語、食べものを通して人間の文化を考え、(7)、(8)、(9)では、人間の身体、人間の尊厳とは何かを考えることになる。そして最後の(10)では、この総合学習“生物的存在としての人間——自分自身の理解のために——”のまとめとして、人間が人間として生きるはどういうことなのか、そのための必要条件と十分条件ということを考えさせたい。

今回のレポートは、中3における「ゆとり」の時間を利用した総合学習の実践に向けての試案を示めしたに過ぎない。実施にあたってはまだ多くの変更が、内容、方法ともに多くあるものと思われる。そのことによって試案のもつ問題点が少しあは解決されて行くであろう。

私たちのグループは、国語(鈴木・白井)、社会(川田・田中)、理科(高須・松井・三橋)、英語(山田)、技術・数学(徳井)、家庭(増田)、保健(安藤・高橋)とほぼすべての教科をカバーしている。各自がそれぞれの専門性を生かしながら、前述の10のテーマをさらに徹底的に論議し、深めて行けば、教師集団の“総合学習”を前提とした、実のりのある総合学習の実践が展開できるであろう。次号では、実践篇のレポートをしたい。(田中)